諏訪形入門Ⅱ

主催:諏訪形自治会•諏訪形誌活用委員会

諏訪形誌活用委員会では、昨年に引き続いて「諏訪形自治会 交流親睦会」の一環としてウォーキングイベントを開催させていただきます。昨年は北沢伴康さんの講演の後、主に諏訪形の東半分を北沢伴康さんと窪田善雄さんの案内で歩きました。今年は諏訪形の西側、南側を中心に回っていきたいと思います。昨年に引き続いてご案内いただくのは、諏訪形誌活用委員会顧問・元諏訪形誌編集委員 長の北沢伴康さんと諏訪形誌活用委員会委員の窪田善雄さんです。

コース概要				
諏訪形公民館 -	250m	-田中の道祖神 350m	-諏訪神社 150r	
森の木1 450m	号•2号古墳	——— 金窓寺川遊水池 350m	道近田の道 400m	祖神 ——— 200m
渋取田古墳跡 -	80m	−花の木地籍の廻り場 ──	350m	-諏訪形公民館 合計 約2.5km

田中の道祖神・道近田の道祖神

諏訪形には現在、5基の道祖神があります。道祖神について、『諏訪形誌』では次のように記述され ています。

道祖神は、「猿田彦大神」をはじめとする道案内の神とされ、「塞の神」とも呼ばれています。また、村落への邪霊の侵入を防ぎ、旅人の安全を守る神として、古来から庶民の信仰の対象となっていました。江戸時代以後は、その形状から良縁、安産、夫婦円満、子どもを守る神として、多岐にわたって信仰されてきています。またその多くは、祀られている場所が村境となっています。諏訪形では、概2村の東西南北にあたる地籍に立てられています。諏訪形にある道祖神はいずれも、建立年は不明

○東 通称カンカン石の隣 〇西 北田中と辻田の境 〇南 堂村公民館北側 〇北 東浦と北浦の境

これらのほか、中村と須川地区にも、それぞれ1基ずつの道祖神があります。また、諏訪形の住居地域が広がったため、昭和58年(1983)には、深町地籍にも新たな道祖神が建てられました。

平成29年(2017)、カンカン石の隣道祖神前の道路を拡幅する工事が行われた際、現在の道 ー版と3中(と0117、カンガンロの瞬間は中間の連路を拡幅するエ事が行われた際、現在の連 祖神の下から塔身(高さ1.05m、幅45cm)が真ん中から二つに割れた道祖神が出土しました。 そこには文政十丁亥(1827)2月8日高町と線刻されていました。この年はカンカン石建立の1 0年後にあたります。また、同所が毎次型の五輪塔と思われる「火輪」も出土しました。これらが何 を意味しているのかは不明ですが、埋め戻されました。

【コラム 道近田の道祖神の建立】

諏訪神社

諏訪神社について、『諏訪形誌』268~271ページで以下のように紹介されています。

諏訪神社は、古くから諏訪形の地に鎮座し、地域共同体の象徴として人々の協力・連携・親睦に寄与してきました。諏訪湖畔の諏訪大社が諏訪神信仰の総本社で、その末社が全国各地に創建され、軍神、農耕神、狩猟神として信仰を広げていきました。その数、大小合わせて約一万社に及びますが、私たちの諏訪神社もその一つです。

諏訪神社に祀られている神様は、「建御名方命(諏訪神)」といいます。この神について、諏訪地方では次のような神話が伝承されてきました。そもそも諏訪の地を支配してきたのは、「モレヤ」(洩矢・守矢・守屋などと表記)という土着の神でした。森の恵みを狩猟・採集で得て暮らす人々の神で、諏訪の御柱の起源もこの神にあるとされます。

そこに外から建御名方命が現れ、モレヤを制圧したというのです。この神話は、狩猟・採集を主とする縄文文化が、稲作農耕を主とする弥生文化に転換していく現象を反映していると考えられていま その一方、建御名方命については、『古事記』に以下の物語が語られています。 建御名方命は、

らかったわけて、八地が虚じられます。このよとする地方勢力の気概が感じられます。このように、建御名方命は、縄文から弥生への転換、そして大和政権の拡大という二つの重大な出来 事を反映する特異な存在といえましょう。

さて、諏訪形の諏訪神社かいフ島屋となる。 、残念ながら分かっていません。律令体制にって信濃国に設置された小県郡は、八つの郷の一つに「須 から構成されていましたが、その郷の一つに「須 波郷」がありました。第三章で述べたように、「須波郷」がありました。第三章で述べたように、「須波郷」は、塩尻から常磐城、そして諏訪形までを含み、現在の上田市西部一帯に広がっていたと考えられています。「須波」は「諏訪」に通じ、現在でせば、サガスには諏訪神社が多くあります。 「須



昭和初期の諏訪神社とその周辺

この地域一帯が何らかの理由で諏訪大社との深い関係を有し、その結果この地域が「須波郷」とされたのかもしれません。そうだとすれば、諏訪形の諏訪神社は、奈良時代にはすでに存在していた可能 性もあります。

諏訪形の諏訪神社の来歴について、確認できた最古のものは、昭和3年に諏訪神社が内務大臣に提 出した「社格昇進願」です。「社格」とは、戦前まで存在した神社の公的ランキングで、諏訪神社は、 並ランクの「村社」でした。これを一つ上の「郷社」にしてくれと願い出たのです。当時の諏訪神社 のプライドが偲ばれますが、結局この願いは却下されてしまいました。

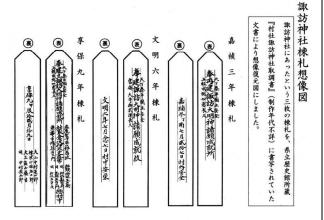
上記のように『諏訪形誌』では「諏訪神社の来歴について、確認できた最古のものは、 【注】 昭和3年」と述べていますが、宝永3(1706)年の『宝永の差出帳』に「諏訪神社」 の記載があります。

それはともかく、その「願」の文書に、神社の来歴が記されているのです。その内容を以下に略記 します。

- 〇諏訪神社は、諏訪大明神と称していた。 〇嘉禎3年(1237年 鎌倉時代前期)社殿を再建、また諏訪大社上社より注連(しめ飾り)を 授かった。

- 〇文明6年(1474年 室町時代後期)社殿を建て替えた。 〇享保9年(1727年 江戸時代中期)社殿を改築した。 〇明治17年(1884年)社号を諏訪大明神から諏訪神社に改称した。

この「社格昇進願」の元になった原典資料がどこかにあるはずです。県立歴史館所蔵の『村社諏 訪神社取調書』(制作年代不詳)という手書きの資 の3枚は、享保9年の社殿改築の時、いっぺんに 書かれたもので、享保9年の実際の改築を記録し 音がれたもので、享味9年の美味の放棄を記録し た1枚に、過去の改築伝承を2枚に書いて加えた のではないかと推定することができます。そうだ とすれば、少なくとも、江戸時代享保9年の社殿 再建だけは、原典資料で確認できることになります。 年の伝承については、未確認のままとなります。



しかし、中世までさかのぼる嘉禎3年、文明6

続いて、現在の諏訪神社の活動について述べます。諏訪神社の神事は、「神社委員会」が担っています。神社委員会は、諏訪形、中村、須川各自治会の隣組組織を選出母体とする神社委員によって構成され、諏訪神社での農耕神事を中心とした諸行事を運営しています。神社委員会は、おそらくそのルーツが江戸時代に遡る貴重な組織です。諏訪神社の伝統行事が曲がりなりにも現在まで存続してきたのは、神社委員会という組織があったからに違いありません。神社に関わる活動は、厳密に言えば宗教活動であり、当然それへの参加は任意ですが、地域創生の観点からも大切にしていくべき貴重な伝統と言えるでしょう。

神社委員会は、以下の行事を実施しています。 〇新入学児童学力向上・交通安全祈願祭

- - ・3月、城下小学校の新入生を招き、学力向上、交通安全を祈願する。近年に始まった行事と思 われる。
- ○諏訪神社春例祭
- ・4月、諏訪形各所に幟を立て、本年の豊作と息災を祈願する。〇大山祇神社八十八夜祭
- 5月上旬、須川の大山祇神社にて、八十八夜の神事を行う。
- 〇石尊社参拝
 - 5月中旬、石尊山(小牧山の小ピーク)の祠を参拝する。この祠は、雨乞いの対象として信仰 されてきたらしい。
- ○諏訪神社秋例祭
 - ・九月、各所に幟を立て、本年の豊作と息災を感謝し、次年の息災を祈願する。
- 〇大祓祭
 - 一年の罪穢れを祓って浄化する。
- ・12月、一年の罪 〇二年参りと元旦遥拝
 - 〒ラランに三点 F ・諏訪神社にて、夜通し焚き火をし、参拝者にお神酒 ・や御供物をふるまう。そして、元旦の朝日を遥拝す

元旦、本殿から鳥居を見ていると鳥居の向こうから 新年の朝日が昇り、やがて本殿の鏡を照らします。 そのように参道、鳥居、本殿のラインが正確に設計 されているのです。現在は宅地造成のため見えにく くなってしまいましたが、いにしまれました。 神社に寄せてきた人々の思いを感じることができます。時代とともに社会は大きく変化していきますが、



本殿に光が射し込む神々しい初日の出

それでも変わらない地域の大切なものを 私たちは、諏訪神社の存在を通して意識していきたいものです。

【コラム 諏訪神社境内の別神社】

諏訪神社に向かって右側に、小さな社がふたつ並んでいます。それは、諏訪神社に近い方から、天神宮と蚕影神社です。これについては、多少いわくつきの話が伝わっています。

明治44(1911)年、小牧山の字東山から 蚕影神社が、そして須川から諏訪神社が諏訪形の 諏訪神社境内に移されたという記録が残っています。その経緯は不明ですが、須川の諏訪神社については、お祭りも一緒にやったらどうだ、というようなことで移転の話がまとまったのかもしれません。実際、現在の諏訪神社のお祭りには、すべて須川自治会も参加しています。 て須川自治会も参加しています。

こうしていったんは、諏訪神社の社の隣に須川からやってきた諏訪神社の社が並び、その隣に蚕影神社が並ぶという形ができました。このふたつの神社とは別に、境内入口付近に石造りの小さな



天神宮がありました。この天神宮の社がだいぶ傷んできたのかもしれません。諏訪神社の隣には、 川から移された諏訪神社の社が建っていました。「諏訪神社がふたつ並んでいてもしょうがない、須川から移された社に天神様を遷し、天神宮にしてしまおう」という話になったのではないでしょうか。こうして、諏訪神社の隣に天神宮、その隣に蚕影神社が並ぶ現在の姿となりました。古老によれば、須川では、しばらく「俺らの諏訪神社を諏訪形に持ってかれちまった」という話があったそうです。

諏訪神社にはこれ以外にも、境内の南西側などに多くの石祠があり、それぞれ飯縄社などの神々が祀られています。ただ、どの祠が何なのかについては記録や言い伝えが残っておらず、残念ながらよくわかりません。

また、『諏訪形誌』271ページ(本文中および上の写真)で、諏訪神社本殿の隣にある建物を「水天宮」と紹介していますが、「天神宮」の誤りであると思われます。

【NEW!!】諏訪神社と「三本松」 石尊山(通称 三本松)の山頂には石祠が祀られていて、その周辺は諏訪神社の氏子の皆さんによって守られているエリアです。このあたりはたいへん景色の良い場所ですが、登って行くには、ややルートが荒れてしまっています。先日、「ナチュラリストクラブうえだ」の皆さんと諏訪形まちづくり協議会、諏訪形誌活用委員会のメンバーによって三本松周辺の樹木の整備などが行われ、とても良い場所になりました。舟窪平方面からだと登りやすいです。なお、「ナチュラリストクラブうえだ」の皆さんの活動は「youtube」で紹介されています。「上田市東山」で検索してみてください。

廻り場跡

「廻り場」について、『諏訪形誌』231ページから引用します。

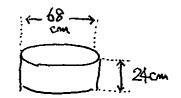
死者の魂が後戻りすることを避けるための呪いとして、「廻り場」を使った葬儀が行われていました。これがいつまでなのかははっきりしませんが、明治初期ころまでではないかと思われます。かつて、諏訪形には3か所の「廻り場」があったと伝えられています。現在では、「花の木」地籍と「中沢」地籍にあったものが確認されています。中沢地籍にあった「棺台」は現在、金窓寺本堂前に移転されています。この台は直径68cm、高さ24cmの石で、「寛政6年寅」の銘があります。寛政6年は江戸時代、1794年です。

葬列が廻り場に着くと、導師の僧侶が読経をする中で、石のまわりを3回半まわってから、棺を石の上に載せました。会葬者の焼香が終わると、導師が、木製の小さな鍬をとって、右手で数回円を描き、大きな声で「カッ」と言って、死者の霊魂が迷わず悟りの道に行くことができるよう、引導を渡しました。この葬儀の後、会葬者は葬列を組んで、墓地へと向かいました。

野辺送りの途中で葬列が廻り場に着くと、導師の僧侶が読経をする中で、棺を棺台に載せて左回りに3回半回してから、導師が木製の小さな鍬をとって、右手で3回大きく円を描いた後、大きな声で「カッ(喝)」と言ってこの鍬を棺に投げつけて、死者の霊魂が迷わず悟りの道に行くことができるよう引導を渡しました。その後、会葬者は葬列を組んで墓地へと向かいました。埋葬後は来た道とは別の道をたどって帰りました。このような儀式は明治時代の末ごろまで行われてい たようです。



廻り場で行われる葬儀の進め方について、『諏訪形誌』の記載とこの資料での記載との間に若干の齟齬があることはお気づきのことと思います。この儀式については地域や時期によって差違があるようですが、『諏訪形誌』発刊後の聞き取りや調査によって諏訪形ではこの資料にあるような進め方が主なやり方 【注】 だったようです。



今回のイベントでは、『諏訪形誌』本文中にも出てくる、中沢地籍と 花の木地籍にある廻り場跡を巡ります。

森の木1号・2号古墳

敷地内に未発掘のまま残っています。

『諏訪形誌』35ページでは以下のように紹介されています。

森の木1号古墳

大正時代まで、金窓寺西側、信濃合金株式会社南側の道路沿いに墳丘状の「森の木1号古墳」がありました。大正15年(1926)、県道上田・塩川線の拡張工事が行われた時に、この古墳の発掘調査が行われ、古墳時代末期の作と考えられる鉄刀三本、銅環一個、馬具の残欠などが出土しました。鉄刀のうち一本は刀身が1メートル以上もあり、上小地域でこれまでに出土した中では一番長いものとなっています。この鉄刀は現在、「信濃国分寺資料館」に展示されています。



上小地方で出土した一番長い鉄刀

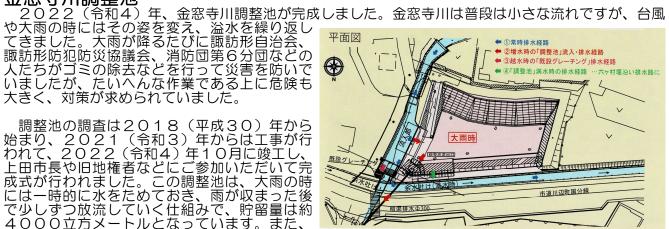
森の木2号古墳

森の木2号ロ頃 森の木2号古墳は昭和26年(1951)、六ヶ村堰の改良工事が行われた時に発見されました。 現在は、市道国分・川辺町線(小牧バイパス)の諏訪形信号近く、増澤弘宅裏の旧六ヶ村堰沿いに大 きな天井石3個が露出しているのみで、それ以外はすべて埋没しています。古墳時代末期の横穴式円 墳とみられており、羨道入口は南東方向と考えられています。この古墳はまだ末調査ですが、盗掘の 痕跡がないことから貴重な発見も期待でき、発掘調査が待たれます。

金窓寺川調整池

いましたが、たいへんな作業である上に危険も 大きく、対策が求められていました。

調整池の調査は2018(平成30)年から始まり、2021(令和3)年からは工事が行われて、2022(令和4)年10月に竣工し、上田市長や旧地権者などにご参加いただいて完成式が行われました。この調整池は、大雨の時には一時的に水をためておき、雨が収まった後で少しずつ放流していくけ組みで、貯留量は約 で少しずつ放流していく仕組みで、貯留量は約4000立方メートルとなっています。また、 事業費は約1億6000万円でした。



図版:城下地区排水対策事業竣工記念冊子より

渋取田遺跡(県企業局上田水道管理事務所)

渋取田遺跡について、『諏訪形誌』30~31ページに以下のように記述されています。

平成18年(2006)から19年(2007)にかけて、長野県企業局上田水道管理事務所の浄水池増設工事が行われました。この場所は以前から遺跡があると考えられていたので、工事に際して 市教育委員会によって発掘調査が実施されました。

この調査の結果、古墳時代前期から平安時代後期までに造られた竪穴住居跡が13棟、造られた時期が不明の掘立柱建物跡が4棟、井戸跡が1か所、土抗(土を掘りくぼめた穴)が14か所、溝跡1 か所、小穴167か所が発見されました。

また、3か所から須恵器の大甕を1.3mから1.7mの間隔で埋設した遺構が発見されました。この遺構は貯水用の施設であったと考えられています。ここに使われた須恵器の大甕は、これまでに市内で出土した甕の中では最大のものです。このような須恵器の大甕は平安時代前期(9世紀)のものが多く、この遺構も平安前期のものと考えられています。井戸跡は各辺が1.1mから1.2mの方形で、井桁状に板を組み合わせて築かれていました。深さは検出面から約1.8mあり、全体では2.8mほど深さがあると見られています。この井戸は、この地に生活する人々の飲み水や生活用水をくみあげる井戸として大きな役割を果たしていたものと思われます。

渋取田遺跡からは、このほかにも、縄文式土器、古墳時代から平安時代まで使われた土師器や須恵器、灰釉陶器などが多数発見されました。弥生式土器は発見されませんでしたが、縄文式土器の発見は注目に値します。渋取田遺跡によって、諏訪形には縄文時代から人が住んでいたことが明らかになるからです。その意味で、渋取田遺跡は私たちにとってたいへん貴重なものですが、現在では浄水場となっていまった。これ、遺跡そのものは存在しません。多くの出土品はこの地域の歴史を知るため、まずまったなっていまった。これによったなっていまった。これによったなっています。 めの重要なものとなっています。









発掘作業中の渋取田遺跡













渋取田遺跡で発掘された土器類